



Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター
Newsletter No.60 (2018.10.12)



外国語ご担当、 4名の新しい先生方からのメッセージ

広島市立大学では、昨年度2名、そして今年度2名、外国語（国際学部、原先生は英米文学、文化ほか）を担当される新しい先生が着任されました。個性豊かな先生方からの、自己紹介を兼ねたメッセージをご紹介します。

目次：

外国語ご担当、4名の新しい先生方からのメッセージ

国際学部 田浪 亜央江先生・・・1

国際学部 斎藤 祥平先生・・・1

国際学部 藤原 優美先生・・・2

国際学部 原 雅樹先生・・・2

いちだい知のトライアスロン映画上映会報告・・・2

神なき世の終わりになき刻一刻の天の花園

モネ《睡蓮》

名誉教授・芸術資料館もと館長 大井 健地先生・・・3

大学英語教育学会中国・四国支部春季研究大会

国際学部 岩井千秋先生・・・4

セントメアリスカレッジ職員が語学センターを訪問・・・4

アラビア語の世界と授業

アラビア語 国際学部准教授
田浪 亜央江



日本語に翻訳されることは永遠になさそうなアラビア語のマイナー文学を読んだり、アラブ・ポップスを楽しんだりするのも幸せなことですが、何といても「アラビア語が出来る喜び」を感じるのは、現地で偶然知り合った人の家をそのまま訪問してご馳走になったり、現地の人からこっそりと（現地の人同士では打ち明けられない）話を教えてもらったりする瞬間です。大学のアラビア語学科に入学が決まったあと、改めてアラビア語の文法書を開き、（当然ながら）判読不能な「ミミズののたかったような文字」を見てショックを受けたあとき、まさか自分の人生にとってアラビア語がこんなに大きな意味をもつものになるとは、まったく想像もできませんでした。日本でもお世話になった方、教えを受けた方はたくさんいます。でも人生の楽しみ方とか、日々の生活に「粋」や「華」を添える生き方の作法のようなものは、

私の場合、アラビア語を通じたアラブの人との交流のなかで得たものに尽きてしまうような気がします。大学のアラビア語の授業の中で、アラビア語の美しさ、アラビア語が出来ることで広がる世界の楽しさ大きさの一端を伝えること。それは本当に難しいことです。目をつぶり耳をふさいでいる人に何を差し出しても無理ですが、「関心がある」学生に対しても、着任以来本当にわずかなことしか出来なかったという気がしています。「アラビア語の授業が楽しい」と思ってくれる学生がいるとしても、私はこう言いたい。アラビア語の楽しさはこんなものじゃない。現地に行ってアラビア語で直接コミュニケーションをとり、彼らの作法になじみながら、自分の固定観念が変わっていくのを実感することに比べたら、大学での授業なんか爪の切れ端のようなものです。大学の授業なんてそんなもの、でもその小さな入り口を通り抜ければ、大きな世界に近づきやすくなります。私自身の学生生活を追体験しつつ、小さな失敗や喜びを日々重ねながら、着任して一年半があっという間に過ぎました。

ウィーンへの短期留学

ロシア語 国際学部講師
斎藤 祥平



在外ロシア人（ロシアの外にいるロシア人）が、ロシアと他国の狭間で果たしてきた様々な役割に関心があります。そのため、これまでロシア以外の国・地域にも留学や研究滞在をしてきました。学生の頃、初めて行った外国がロシアで、モスクワ大学への交換留学でした。その後、ウィーン大学への短期留学を経て、チェコ共和国のマサリク大学にチェコ政府の奨学金制度を使って留学しました。広島市立大学に着任するまでは、ドイツのミュンヘン大学で研究を行っていました。

留学の手段は多様に存在します。大学の交換留学の派遣先にはない国や地域でも、探せば何らかの手段があり、運が良ければ支援も受けることができます。積極的に情報収集をしてみましょう。

実は、私にとって重要な転機となったのはウィーン大学への短期留学でした。私はそれまで、日本ではドイツ語をほとんど習っていませんでした。だからこそ、この留学では現地に滞在し生活すること、もっと言えば、その言語を使わないと生活できないという状況に追い込むことが、語学習得の近道だということを学びました。ウィーンでは、スペイン、キプロス、セルビアからの留学生とアパートで共同生活し、充実した日々を送りました。

ただしその後、チェコへと留学し、再びロシアに研究滞在したことによって、ドイツ語は残念ながら「リセット」されてしまいました。語学の習得には、その言語を使い続けることもまた重要であると痛感しました。しかしウィーンへの短期留学がなければ、その後ドイツで研究滞在するという選択肢はなかったであろうことを考えると、私にとって大きな転機となった留学でした。

広島市立大学の短期語学留学の参加者には、実際に語学習得の感触を得たという学生もいます。また、これまでに留学先の言語を学んでいなかったとしても、やる気があれば現地でのサバイバル体験を通じて、ユニークな着想を得る機会となるかもしれません。皆さんにとって、何かのきっかけになることを望んでいます。

楽しく勉強しましょう

中国語

国際学部講師
藤原 優美

皆さん、こんにちは。今年の4月、国際学部に着任した藤原優美です。専門は言語学で、特に日本語と中国語の対照研究です。語学センターでは、中国語を担当しています。

あらゆる分野でグローバル化が進んでいる今日においては、多様な人々との交流、国際協力、共存が必要となってきています。こうした中で、英語はもちろん、それに加えてもう1つの外国語を身に付けることも大切です。英語は世界で通用する言語と言われていますが、日本と中国は隣国であり、古くからいまでも経済・文化などの交流が多く、また、中国は世界的人口大国で、高速な経済発展に伴い、世界における存在感や影響力も大きいので、今後中国語はますます重要になるでしょう。大学で中国語を身に付ければ、将来きっと何かに役に立ちます。

一方、世界中にあふれている情報の中に、日本語で記録されているものはごくわずかで限られています。中国語やほかの外国語を学ぶことで、より広く情報を得ることができます。言語が違えば、物事を見る目線も違います。いつもと異なる視点から情報を知ることは自分の枠を超え、視野を広げるために重要なことです。

また、中国語という新しい言語を学習することを通して、母語である日本語と向き合う機会にもなります。中国語ではこのように言うのを日本語ではどのように表現するのか、同じ漢字なのに、なぜ意味用法が同じものもあれば、違うものもあるのか、など、様々なことが発見できます。

しかし、もっとも大事なのは楽しく勉強することです。就職に必要な、資格を取りたい、なども重要ですが、学習意欲を維持し続けるのはやはり、知りたい、学びたいという興味や関心です。これらがあれば、学習は苦にならずに進み、知識を得ることができます。

私は言語を学ぶことや研究することが好きなので、ずっと続けてきたと思います。皆さんも中国語だけでなく、大学での勉強を楽しんでみませんか。

原先生からの「新任教員メッセージ」 聞き手：山田（仮名）

英語

国際学部講師
原 雅樹

——こんにちは。山田です。今回は、「新任教員メッセージ」をいただくために、先生の研究室にお邪魔させていただきました。ところで先生、まだ引越しの片付け中なんですか？ダンボールに荷物が入ったままじゃないですか。ちゃんと片付けましょうよ。

原：えーと、それはすみません。でも、ダンボールは邪魔にならないように隅に寄せてあるんだし、いいじゃないですか。それに、ちょっとずつ片付けてますから。研究室の片付けくらい、自分のペースでやらせてほしいですね。

——先生ってマイペースなんですね。ぜったいB型ですよ。ていうか、ぜったいネコ派ですよ？

原：個々の自由を尊重し合いたい派ってことですよ？それはそのとおりです。ただ、ネコが自由だっていうのは、ちょっとちがうんじゃないかなあ。

——どういふことですか？

原：つまり、ネコ自身が自由なのではなくて、人間が勝手にネコをそのようにみなしている、ということです。

——えっと、要は、自由な動物としてのネコは、人間がつくりだしたイメージにすぎないってことですか？

原：そうです。山田さんは、たまにとてもするどいですよね。

——「たまに」は余計です。

原：ところで、近年流行のSNSではネコ動画が大人気じゃないですか。なぜなんでしょうね。ネコを見ていると癒やされるから、という理由だけじゃない気がするんですが。

——もうちょっと説明してください。

原：現代人がSNSでネコ動画をシェアするときに、無意識のレベルでは、自由という価値に「いいね！」をしているんじゃないでしょうか。また、ネコはSNSというメディアと相性がいいのかもしれませんが。SNSの特徴って、自分の好きな時間と場所で、他人とつながれることですよ。

——ふむふむ。SNSは、いわばネコのメディアなんじゃないか、と。あ、ところで、先生からメッセージをもらうのを忘れてました。

原：メッセージを発するって、あまり得意じゃないんですよ。各自、自由にやっていただければいいんじゃないでしょうか。

——そうくると思ってました。でも、それは、「自由を大事にせよ」っていう、一種のメッセージですよ？

原：うーん、いつもいいところを突いてきますね！短かったですが、楽しい対話になりました。普段の授業でも、こんなふうな対話ができればいいなあと思っています。

(*一部フィクションあり)



2018年度前期 いちだい知のトライアスロン映画上映会開催

6月18日(月)～6月22日(金)に、語学センターにて、いちだい知のトライアスロン映画上映会を開催しました。国際学部専門科目「多文化共生入門」との連携企画で行い、国際学部の田川玄先生に映画の推薦と解説をしていただきました。後期には、国際学部専門科目「言語・コミュニケーション研究入門」との連携企画で映画上映会を開催予定です。

テーマ： 他者とめぐりあう：ドキュメンタリー映画をみる

映画解説：6月18日(月) 14:40～17:30 国際学部 田川玄先生「アクト・オブ・キリング」



失われた時を求めて美術館 2

À LA RECHERCHE DU TEMPS PERDU

神なき世の終わりになき刻一刻の天の花園

モネ<睡蓮> 1903-08 パリ・マルモッタン美術館 (岩波文庫版⑧ 467、図 26)

大井健地 (名誉教授・芸術資料館もと館長)

『失われた時を求めて』(以下『RTP』と略)のなかの様々な挿話のうち、最も有名なのがマドレーヌ菓子匂いと風味が立ちあらず回想である。この話はむしろ小説全体を代表する。

「無意志的記憶」(後述)として、「ハーブティーに浸けたマドレーヌのかげらの味」によってコンブレの広場や小道、スワン氏の庭の花やヴィヴォンヌ川に浮かぶ睡蓮などが、「私」のティーカップからあらわれ出る。

匂いや味が思いがけず呼びさましてくれた昔のことは、意志的な知性や視覚の記憶によってこしらえてきた過去の“絵”がいかに嘘々しいかをわからせる。感覚の偶然をきっかけにひとりてにやって来た思い出。この現象を「無意志的記憶」の想起という(鈴木道彦『プレストを読む』47頁など)。

味覚の幸福から田舎のみずみずしい情景があらわれる仕組みをプレストは日本の水中花で説明する。「日本人の遊びで、それまで何なのか判然としなかった紙片が、陶器の鉢に充たした水に浸したとたん、伸び広がり、(略)花や、家や、人物になるのと同じ」(①117)だと。水中花って知ってました?室内遊びの玩具でもある紙工芸品の造花。水中で咲くこと、それは詩的喚起力を秘めて異界をつなぐ、のではないか。酒中花ともいうそうではそれは粋筋、お座敷芸なのだろう。

なじみの度合いは年代にもよる。縁日の夜店でよく見かけたというのは僕より年長の研究者(保莉瑞穂『プレスト読書の喜び』など)。ところで俳句の世界では水中花はよく詠われ寿命長く人気高い。句意としては死をイメージするようにも思える。以下『現代俳句歳時記』等による。

水中花死者の顔剃る音聴こゆ	梅木俊平
病人に一人の時間水中花	稲畑汀子
水中花誰か死ぬかも知れぬ夜も	有馬朗人
いきいきと死んでゐるなり水中花	樫未知子

*

軽い電子辞書は重宝、スイチュウカを検索して名句と出会い、スイレンを検索して色鮮やかな開花写真に出くわした。辞書本体のほかに感動モノの附録図版がうれしい。真昼の水上、赤い大輪の花が群青の水面に映え、乾いた白緑の葉はどれも相似で、同じ角度の切り込みのある正円形。自然があまりに平面的で、天然の模様があまりに幾何学的に思える。葉、花、水辺に生きて栄えるこの植物の形状とその摂理が明快な幾何学的典型として存在しているのだ。くっきりと鮮やかなのにびっくりもするが、この端麗な平面性がモネの絵画境とは全然違うのに気づく。それがおかしい。モネの<睡蓮>は全然スイレンなんか描いてはいないのだ。モネの関心は自分の絵の課題ばかりに向いているのだ。モネの関心は光——天然自然の変化と流動のさまを光でとらえることだ——。

果てのない自然の運行をも表現しようとするその画業は連作というシリーズ制作を生む。つみ藁 15点、ポプラ並

木 10点、ルーアン大聖堂 20-30点、そして睡蓮 45点以上。モネはジヴェルニーに睡蓮の池を造営し日本風の太鼓橋を掛けている(庭師を5人も雇ったという)。そして画業の集大成としてパリ・オランジェリー美術館の睡蓮の間に果てのない自然の循環を絵画化したのである。

ヴァチカン・システィナ礼拝堂に行けば僕らはルネサンスの大巨匠ミケランジェロの偉業を眼のあたりにでき、パリ・オランジェリー美術館では近代の一個人によって捉えられた神なき時代の自然の運行のパノラマ空間を体験できる。<天地創造>の下では僕らは叩きのめされ潰されて一匹の虫ケラに(心の中で)なるしかないが、「睡蓮の間」ではミズスマンに変身して水辺をのびのびと浮遊できる。日没から雲・緑・朝・樹木・光を経てやがてまた日没へ、終りのない反復の、絵による自然交響曲。

小説によって人の生きた「時」を甦らせるのがプレストの『RTP』だとすれば、モネは朝昼晩や季節のうつろう時を絵画の光によって水辺に表現した。『RTP』登場人物は多数だが<睡蓮>にはゼロ。人影はない。風俗要素は削ぎ落されており、水中花の遊戯性は全くない。鑑賞者はひとりでこの時の変遷に対処する、または対決する。自然の営みだけで無人であるとは即ち、原始的であり、生命を黙想させる岸辺であ

らう。

*

プレストは「睡蓮の間」を見ず、ジヴェルニーを訪れてないが、「花を植えたというよりは、さまざまな色調と色彩を植えた庭園、昔ながらの花の園というより、そうやってよければ、むしろ色彩の園とでもいうべき庭園」とモネの庭の器能を見透している(詩集『眩惑』書評 1907年6月)。

次の評言も美しい。モネの「この水面は実に天空にほかならず、この睡蓮のかたまりは天空にたなびく雲の一团にほかならない」(P.ミル 1909年、吉川一義による)。空の雲、地上の樹木、水上の植物。環境の条件は世界の根源や太古と結びついている。水面に光が反射して水鏡になる。モネの視線はやがて横斜め上からとなり、多層な空間を含みこんだ水面のみに視野は限定され大小や距離の不明をおそれない。虚像と実像が混在し、対岸の事物は転倒して反映する。遠近法は幾重にも攪乱させられ画面の焦点を欠いたオール・オーバーな正方形の内部に複雑化しあいまい化する。

モネを見たプレストが『RTP』に取り込んだ睡蓮の描写(①366)を摘記する。「パンジーが庭という庭からチョウの大群のように飛んできて」「羽を水の花壇の透明な斜面に憩わせているといった風情」。それは「空の花壇」。空こそ花に土壌を提供する。「たえず移り変わりつつ」「つねに刻一刻のなか」、「まるで天空の高みに睡蓮を映かせたように見えるのだ」。

学会報告

大学英語教育学会（JACET）中国・四国支部春季研究大会

国際学部教授 岩井 千秋



講演会の風景

さる6月2日（土）に一般社団法人大学英語教育学会（JACET）中国・四国支部の2018年度春季研究大会で語学センターを使わせていただきました。この支部大会を本学で開催するのは今回が2回目ですが、4年前にはこの学会の年次国際大会を本学にて実施しました。あのときには、国内外からおおよそ860名の来場者があり、会場校担当者として大わらわであったことを思い出します。今回は支部の大会ですから、規模はずっと小さかったのですが（参加者50名超）、報告者の岩井は一昨年からのこの学会の支部長を担っており、会場校世話役と支部長の二足の草鞋で忙しい一日となりました。

支部大会は主に3部構成でした。まず午前11時に開始した役員会ですが、共同研究室では手狭であったため、408教室を使用しました。続いて、研究発表会を午後1時から行いました。今回は全部で8件の発表があり、403Aと403Bの2教室を会場に割り当てました。動機づけや評価方法、それに内容言語統合型学習（CLIL）と呼ばれる指導方法についての発表など、興味深い発表がありました。本学国際学研究所博士後期課程の学生による発表もありました。

最後に講演会ですが、これには株式会社進研アド中国・四国支社長の延原範昭氏を講師としてお招きし、「入試改革の動向と高校教育改革の現状～英語教育を中心として～」と題してお話をさせていただきました。周知のとおり、2020年に大学入試制度が大きく変わります。新制度は中等、高等教育の英語教育のあり方そのものを変革することが主目的とされており、本学会の会員にとっても重要な関心事です。通常は学術色の強い講演会ですが、今回は趣向を変えて、こうした動向に精通された企業の方をお迎えしたというわけです。90分間の講演後にはフロアから次々と質問があり、この入試改革に対する関心の高さを感じました。

語学センターの充実した施設は来場者にとっても好評で、マイク設備などもしっかりしていて、快適に支部大会を開催できました。使用をお認めいただいた本学関係者の皆様にお礼申し上げます。また、大会には国際学部の学生さん2名にも裏方の業務を手伝ってもらいました。あわせてお礼を申し上げます。

アメリカ・サンフランシスコ セントメアリスカレッジ職員が語学センターを訪問

「外国語授業や自習にこれだけの機器が利用できるのは恵まれている！」

9月11日、本学の海外提携大学の一つ、アメリカ・サンフランシスコにあるセントメアリスカレッジから、シニアインターナショナル オフィサーのSusie Miller Reidさんが来学され、語学センターについて、以下のような感想をくださいました。

" I was very pleased to visit the Hiroshima City University campus on September 11th and had a special tour of the Language Center. I was amazed by the broad range of equipment available for faculty and students to use to improve their language skills in a class or individual setting. There sources available to students are many and I feel that the HCU students are very lucky to have such a center on their campus. The visit has given me ideas which I will share with the World Languages Department at Saint Mary's College of California when I return. "

◆視察・オープンキャンパス等報告◆

- 4月 5日 新任教職員FD・SD研修（31名）
- 6月 7日 進路指導委員対象大学説明会（18名）
- 6月15日 大学監事視察（2名）
- 6月17日 フレオープンキャンパス（83名）
- 6月20日 武田高等学校（32名）
- 6月21日 広島県立東城高等学校（37名）
- 7月12日 広島市立広島中等教育学校（60名）
- 7月13日 安芸太田町立安芸太田中学校（25名）
- 8月 2日 広島県立安芸高等学校（5名）
- 8月 5日 オープンキャンパス（159名）
- 9月 5日 ハサヌディン大学【インドネシア】（学生40名）
- 9月11日 セントメアリスカレッジ【アメリカ】（職員1名）
- 9月12日 北広島町立豊平中学校（25名）

語学センター新任スタッフからのメッセージ



2018年4月に加藤美奈さんの後任として着任しました沖野佳代です。3月まで情報科学部分室に勤めておりましたが、語学センターとはなかなか縁がなく、こちらに着任して施設の素晴らしさに大変驚きました。この恵まれた環境を大いに活用していただきたいと思いますので、みなさまぜひお気軽に語学センターにお立ち寄りください。お待ちしております！

発行日	2018年10月12日	Phone	(082)830-1509
発行	広島市立大学語学センター 〒731-3194	Fax	(082)830-1794
	広島市安佐南区大塚東3-4-1	E-mail	lang@m.hiroshima-cu.ac.jp
編集	堀本真由美 沖野佳代（内線：6410）	ホームページ	https://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html